【研友通信】

独創性について

片木 淳

I 独創性の重要性

我が国が今後来るべき21世紀に向かってさらに飛躍を遂げていくためにも、また、我々個々人が人生80年時代を迎えて生きがい溢れる、有意義な人生を送っていくためにも、「独創性」ということが非常に重要になってくるものと思われる。

「経済が“世界一”と言われるほどのレベルまでくると、人間の欲求も変わってくる。すでに在るものを改良するだけではおもしろくなる。この世に生を受けて死ぬまでに、本当にやってみたいことと、自分に問うと、それは、創造すること、オリジナリティを發揮することだと気づくようになる。これからはそういう若者たちが増え、社会がさらに活性化し、そこから新しい文化や生き方が生まれてくることに対する期待は大きい。」(広中平祐ハーバード大学教授)

我が国は、明治の開国以来、極端にいえば、欧米諸国の研究、開発の成果をいわばそのまま横取りし、猿真似をして高度経済成長を遂げてきたわけであるが、今日においては、周知のとおり「世界に貢献する日本」として、新しいものを創造して世界に寄与していくことが求められている。

「日本にオリジナリティのある研究がすくなかったのは、そういう社会のニーズが少なかったからです。でも最近は研究に対するニーズがガラッと変わりました。たとえば民間企業が基礎研究所をつくる動きが非常に活発になりましたね。また私に一番関係のあるのは応用物理学会ですが、そこで発表される研究や、それに対する反応を見ていると、この十年ぐらいで、まさに様変わりです。オリジナルな基礎研究をやらなければいけないという考えが非常に強まっており、実際にそういう研究が増えてきているのです。」(林 巖雄光技術研究開発つくば研究所長)

さらに、また、今日、「多極分散型国土の形成」が言われているが、ほぼ単一民族からなる社会であることから、ともすれば均一性、同質性の安易なる道に流れようとする「群れ社会」日本国の中にあって、個性と多様性を發揮した独自の地域社会をつくっていくためにも、「独創性」を尊重し、これを育てていくことが大切である。

II 個人主義の確立

独創性を發揮していくために必要なのは、なんといってもまず「個人」の確立である。逆にいえば、日本人の集団依存主義がまず問題である。「日本人は主体性に欠けるといわれ、自我が確立していないとされる。」「自我不確実感は、大部分の日本人が共通にもつ性格特性であり、日本的な自我構造の基本的な特徴といえよう。」「主我の弱さは、意志の弱さを意味する。それは行動にあたって、何を目的とするのかを選ぶ選択力、選択の結果ある目標を決める決定力、決定したことを実際の行動に移す実行力、実行する行動を持続する持続力、さらに持続が困難、不可能になったとき他の目標に切り換える転換力、実行を中止する中止力がふくまれる。」「日本人の集団依存主義は、このような個人をこえた集団との一体化で得られる集団我の支えで、自我不確実感を解消できるという集団心理にもとづいている。」(南 博「日本の自我」)

「研究」に限らず立派な業績を挙げるためには、ある程度は偏執狂的というか、粘着質というか、煩惱の強さというか、一つのことにこだわり、これを徹底的に追及していく「我」の強さが必要である。

「個人主義社会は変わり者をみんなが生かすのではなく、個人の責任で生きていくわけですね。だから、これだと思った時極限まで突っ込んでいく。これが基礎研究で一つの成果を上げる原動力の一つになっている。一方、東洋人は個性の主張が弱いので、自分でこれはどうしてだと思ったときに突っ込みが足りない。それに後進性もあって外国で騒ぐと調べたくないのでですね。」(西沢潤一東北大学教授)

もっとも、このような独創性あふれる人間は、周囲に大分ご迷惑をかけることとなるのは、まちがいないようであるが、

「思うに、「独創性」とか「個性」とかいても、立場を変えると「自己主義」とか「自信過剰」に通ずるであろうし、もっと端的に表現すれば所詮、「個人人間の業」とでもいえるものであろうから、それを持ちすぎている人間と生活を共にすることは、さぞ大変なことであろう。」(江崎玲於奈 同真佐子「江崎玲於奈一家のアメリカ日記」)

いずれにしても、自分の個性を生かしていくということが必要である。

「60兆個の細胞も元をただせば受精卵すなわち一個の細胞です。それが細胞分裂して最後にヒトになるのは、最初の一つの細胞の中に、そうなるような遺伝情報がすべて組み込まれているからで、我々の細胞は、どの細胞を取り出してみても、形や働きは違っても、その中にある遺伝子は、受精卵の中の遺伝子とほとんど変わらないのです。——例えば、インシュリンというホルモンを作る遺伝子は体中のどの細胞にもありますが、実際にインシュリンを作るのは、すい臓のランゲルハンス島というところにある特定の細胞だけです。つまりインシュリンの遺伝子が働くのは、ランゲルハンス島にいるときだけで、他の細胞にいるときは眠っていて、遺伝情報を発現しないのです。——しかし遺伝子がどうして目を覚ましたり起きたりするのかわかりませんが、そのしくみはまだわかっていません。細胞の分化、増殖、がん化といった観点から、インターフェロンやインターロイキン2の遺伝子の発現、制御のしくみを解明することが、現在の大きな研究目標です。また、インターフェロンやインターロイキン2が細胞に対して働きかけるには、受容体という受け皿が必要ですが、この受容体がどのようなしくみになって細胞に情報を伝えるかも解明しなければなりません。今のところ、この二つの課題に取り組んでいます。」「音楽家も科学者も、とても共通するものを感じます。それは、自分が何かをつくり上げていかなければならないのだ、という気持ちを持つことがとても大切だということです。外国でやっているから日本もやらなければ

ば——などという考え方は、本当に間違いないのであって、大切なのは、自分は何を創りあげののかということ、科学にも必ず自分の個性が生きていかなければならないと思うのです。」(谷口維紹大阪大学細胞工学センター教授)

Ⅲ 国際化及び多極分散型国土の建設と個人の確立

、良い悪いは別としても、日本人に個人主義というか、自己の確立というか、そのようなものが欠けていることは、事実である。集団で外国旅行をし、レストランでは全員が同じ物を注文し、自分の好みをはっきりいうことは少ない。重要な国際会議の場においても、我が国の代表は、しばしば最初から終わりまで口をつぐんだままである。言葉の問題もあろうが、元来自己主張をしない、出来ないのが日本人の特性である。これを我が国の美点だという人もいるが、欧米の人(欧米に限らないかも知れない。)にとっては、理解できないもの、不気味なものと感じられ、場合によっては何か魂胆があるのではないかとかんぐられることになる。あるいはまた、まだ人格的に自我の確立していない「子供」と見くだされることとなる。自ら考え、自ら堂々と発表ができ、それを自ら実行する個人の人格の確立が急がれるところである。

国際化時代の地方自治にとっても、多極分散型国土の形成のためにも、このことは特に重要である。「自ら治む」とは、自らのことは自らの責任において、他に依存することなく自らが決定することであり、このためには、主体の一種の強さ、独立的気概が必要だからである。

(前高知県保健環境部長・現総務部長)